

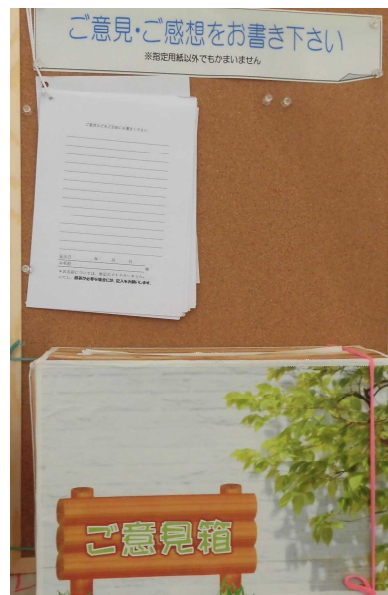
「開かれた学童」を目指して 「ご意見箱」を設置しました！！

日増しに寒さが厳しくなる季節となりました。そんな中でも、明和児童クラブの子どもたちは、元気いっぱい、児童クラブでの生活を楽しめているようです。

さて、明和児童クラブでは、このたび、「開かれた学童」を目指して、「ご意見箱」を設置させていただくことといたしました。児童や保護者の皆様に寄り添った学童として、保護者の皆様のご意見やご要望等を把握し、少しでも運営改善に役立てられたらと考えるからです。

すぐに改善や実行ができることは、少ないかもしれませんが、いただいたご意見等については、必ず検討させていただきます。

ご意見等は、匿名でもかまいませんが、回答が必要な場合にはお名前をご記入ください。ご意見等がありましたら、どんなことでもお気軽に書いて箱にお入れいただけたらと思います。



【それぞれの階に設置しました。】

お願いや諸連絡等

本日（11月20日）、通年会員様あてに、以下の文書をこのたよりといっしょに送付させていただきましたので、ご確認のうえ、提出についてもお願いいたします。

- (1) 「来年度の会員継続の確認等について」（調査）
現在、明和児童クラブでは、来年度の新一年生について受け入れ準備をしていますが、受け入れられる人数を確定していくために行う調査ですので、ご協力ください。提出締め切りは、11月30日（金）です。
- (2) 「冬休み期間（長期休み）ご利用申し込み案内」
- (3) 「平成30年度冬休み期間利用料金表」
- (4) 「冬休みのご案内」
- (5) 「明和児童クラブ利用の予定表」（12月と冬休み分）
ご記入のうえご提出ください。提出締め切りは、12月1日（土）です。

子育てのあれこれ No. 2

子育てでは、「甘え」は受けとめてあげなければならぬが、「甘やかし」てはいけなくよく言われます。そこで、今回は、「**甘えとわがママ・甘やかし**」について書かせていただきます。子育てにおいて、子どもの甘えやわがママをどこまで受け入れて（許して）いいのかということは、私自身もずっと悩んできたところです。

児童心理学のどの学説においても、3歳ぐらいまでは、子どもにとって母親（場合によっては父親や祖父母）に十分に甘えることがいちばん大切であり、それにより情緒の安定が図られ、自主性・自律性や社会性の発達の土台がつけられ、さらには、順調に学業を進めていくための素地がつけられると言われていています。

そのくらい、「甘えさせること」は大切なのですが、一方では、「わがママ」を受け入れること＝「甘やかし」はだめだとも言われています。

それでは、「甘え」と「わがママ」（甘やかし）はどのように違うのでしょうか。

まず、**子どもが身体的な接触（スキンシップ）を求めてきた場合には、そのほとんどは「甘え」としてとらえ、可能な限り受け入れてあげることが大切**だと言われていています。3歳ぐらいまでに十分なスキンシップがあった子ほど、小学生の頃には、安心して親から離れられ、自主性や自律性が育つそうです。しかし、子どもの発達段階には個人差もあり、小学校の中学年頃までは、スキンシップを求めてきても不思議ではありません。また、子どもは、年齢を重ねるにつれて、「甘え」の方法が「スキンシップ」から「話を聞いてもらうこと」（傾聴）に変わっていきます。そして、それはさらに、話を聞いてもらうだけでなく、応答してもらうこと（対話）を求めるようになっていきます。

それでは、事例を通して、「**甘えとわがママ・甘やかし**」について考えてみたいと思います。次のような場合、みなさんならどうしますか？

事例 1

2歳半のA子連れて公園に行きました。すると、親の後を歩いていたA子がころんと倒れました。A子は、起こしてもらいたくて、両手をひろげながら泣きました。

事例 2

5歳のB子と3歳のC男連れてコンビニに行きました。「あのお菓子が欲しい」と2人も言い出したので「ダメ！」という、B子はがまんするといったのですが、C男の方は、床に倒れて、「どうしても欲しい」とグズリ出したので、他の客の視線が集まり始めました。

事例 1 の場合、親がすぐに起こしてあげることが、「わがママ」につながってしまいます。それは「親は自分の要求した通りに行動してくれること」を子どもが学習してしまうからです。それまでに十分なスキンシップを受けている子は、励ましの言葉をかけながら待っていてあげれば、自分で起き上がります。自分で起き上がった後に「痛かったんだね。起こしてもらいたかったんだね。自分で起きられたね。」と言葉かけをしながら親はしっかりと抱きしめてあげればいいのです。「甘えたい気持ち」だけを十分に受けとめてあげることが大切なのです。

事例 2 の場合、子どもが訴えだけで（または、みっともないという親の都合で）お菓子を買ってあげては、これは、甘やかしになってしまいます。「お菓子がほしいんだね。その気持ちは分かるよ。でも〇〇ちゃんならがまんできるはずだよ。」といった対応がベストです。最初はダメと言っておきながら最後に根負けして仕方なく買ってあげたりすると、それは、最初から買ってあげること以上にまずい対応ということになります。「わがママを言い張れば最終的には親は言うことを聞いてくれる」ということを子どもが学習してしまうことになるからです。

とは言え、「甘えさせても甘やかさない」ことはなかなか難しいことだと思います。子どもの「わがママ」を見抜いてがまんさせていくことが、大切なしつけとなるのですが、**基本的には、子どもの物質的・金銭的な欲望をそのまま満たしてしまうことは、「わがママ」（甘やかし）になると考えていいでしょう。「感情や気持ちを十分に受け入れてあげること」と「要求されたことを許すこと」を区別して考える**ことも、大切なことになるでしょう。

*参考文献 「子どもの能力の見つけ方・伸ばし方」「親がすべきこと・してはいけないこと」「『心の基地』はおかあさん」（平井信義）、「アドラー博士の子育てワークブック」「『この一言』で子どものやる気は育つ」「アドラー博士が教える『失敗に負けない子』に育てる本」（星 一郎）、「心づくり、身体づくりの親の役割」（荘厳 舜哉）、「しかるが育てるもの」（高野清純） 他

このコーナーで紹介させていただくようなことは、実践するとなると難しいことも多いと思います。「**できるに超したことはないが、できないのが当たり前**」程度の受けとめで読んでいただければ幸いです。

